

# 「今」の世界

清澤 哲 夫

## 意 識

13 (清澤)

「今」とは一面時間的限定であるのみならず、他面それは超越的世界である。今ここで私は、「今」という言葉を通して、時間上の今だけでなく、永遠の今と言われる様に、ある超越の世界を考えてみたいと思う。否、今という表現自体の中に、その様な世界を指示する何かがあると思う。単純な客観的一言語として時間上の一時点を示すだけでなく、主體的な無限的世界を表示する深い意味がやどっている。試みに、国語辞典を引いてみる事にする。ただしこの際名詞化された客観的一言語としての今が、時間上の一時点を示すものの事であるのは申すまでもなく、この意味の今は除外する事にする。主体との関係行為の中で副詞

的に使用された「今」の意味について見てみたい。用語の使用例は大別して二通りになる。一つは今に最も近い過去、もう一つは今に最も近い未来という事になる。「今来たところだ」(実はもうすでに来てしまっている)とか、「今行く」(実はまだ出かけていない、出かけようとしている)その一瞬を意味している)とかいう様に。一方は正当の今に対して最も近い完了形を意味しているのであり、他方は未来への初発の端的を意味している。どちらも正当恁麼の「今」を意味しているわけではない。国語辞典の用語例の中には、正当恁麼の「今」に相当した用法は見出せない。この事実は深い意味を持った面白い現象だと思う。客観的に抽象化された名詞の今が、具体的現実的な「今」の世界の動態を示すものでない事は勿論、それはただ相対的に限

定された時間上の一時点を示すにすぎない。それに対して、動詞との連関の中で更には主語との関係行為の中で、副詞的に使用された「今」という言葉の中には、正しい今に対する使用例が見出せないという前記の事実よりして、相対有限な言語表現の限界を示すと共に、更にはその主語の主体性の背後に言語表現を越えた絶対的世界を暗示する何ものかがそこにあると思わざるを得ない。『正法眼蔵』の中等に見出される正当、恁、麼の時といった様な表現がその辺の消息を示している。「今」は相対的に時間的限定として一時点を示すのみならず、その表現の背後に超越的世界を暗示する深い意味を持っている。

超越的「今」が今時間的限定として有限の世界に現成し働く姿が意識である。超越的「今」は一面、時間的限定としての今を離れては考え得られない。今は此処を離れては考え得られないし、今、此処は私の生くる姿を離れては考え得られない。今、ここに、我生けり、ということの根源的・具体的把握は、デカルトのいうように、我有りとしての我思うという姿を取らざるを得ない。超越的「今」の世界が、今ここに、我思うという姿となって現成して来ているのである。「今」が今、時間的限定として有限の世界に働き出る姿が意識である。

ところが我々が日常、意識という時には、日常的自然的態度に於ける意識をいうている。それに対してデカルトがコギトという時には、方法的懐疑の操作の極露出し来った明証的立場をいうている。私が今、「今」の現成としての意識をいう時は、かかる純粹意識の立場をいうている。フッサールにしても、判断中止という操作、エポケーの後に露出して来た純粹意識の立場、現象学的立場をいうている。意識とはすべて、かかる立場のものとして考えられて行かねばならない。日常的自然的立場よりいわれる意識はここではすべて問題にしない事にする。

そこで、純粹意識というが、この意識の純粹性とは何を意味するものであろうか。デカルトのいう明証性の立場、フッサールの現象学的先験的意識の立場というものに対して、私は今ここで、超越的主体的「今」の世界の動態としての、絶対性・無限性というものを考えてみたい。だいたいかントにはじまり、フッサールに於いて具体化され深化されて来た先験的という意識の立場は、相対的限定としての今に対して超越的「今」の立場の無限的絶対性を示すものではなからうか。意識の純粹性とは決して相対的客観的に限定されたものを示す言葉ではなく、主体性の背後より根源的主体性と成って働き出す超越的世界の絶対性を示す

ものに外ならないであろう。「今」が今意識として働く時、そこに絶対的無限の世界と相対的有限の世界との具体的・現実的相即が現成する。

この際、自己性とは、有限の側より無限的働きの主体を見た時に、有限の限定として取らえられた無限的主体性をいうのであろう。「我思う」という形で、絶対的「今」の働きが、今ここに相対的有限的に自己自身を限定するのである。そのときそこに、絶対的無が有を有たらしめるという、存在を存在たらしめるという存在論的基底が露出し来たるのである。有限の世界の一切は、現世的世界は、すべてこの基底の上に支えられて有るのである。それは、アルキメデスの槌子の支点の如き一切の有的世界を支える根拠点である。デカルトのコギトの発見も、意識としてのフッサールの現象学的立場も、この根拠点より考えられねばならない。超越的「今」の世界の根源性がそこにある。

### 意識と意味

超越的「今」が今意識として働く場所が、具体的には我々の感覚器官である。勿論この際、感覚器官とは我々の眼耳鼻舌身の五官のすべてを意味している。今、眼に窓外の白雲が映り、耳に路上の自動車の音が聞こえ、鼻に一輪の

花の香りがにおい、舌に鮎のがみを感じ、身に暈の感触を受けている。そしてこうした五官全体から、意識に写映して来る意味の一切の複合合成されたものを、内身に感覚として受け取めている。意識するとは、写すという働きをいうのであり、この際、超越的主体としての「今」の能力が外界の事物の一切を写す働きとして働いているのである。超越的「今」の作用は、前述の如く相対的に客観視し得ない絶対的主体的作用であるが故に、その動態を、フッサールの様に絶対的意識流とよんでもよいであろう。そして五官という写映の場所を通して、写す働きとしての絶対的意識、「今」に映った外界の事物の映像が、現象学的にも意識の意味とよばれるものである。

そしてこの写す働きの意識として現成する超越的「今」の能力が、意識の先験的統括力であり、更には先験的構想力である。カントが問題とした先験的意識の持つ構想力とは、この超越的・根源的「今」の持つ力量を示すものに外ならないであろう。我思うという形を取って「今」が主体的に働き出す時、「今」の超越的力量が意識の先験的統括力として働くのであり、そこに意識の先験的構想力の展開を見るのである。

今、根源的印象として映った一輪の花は、あくまで相対

有限な物的世界のものが、絶対的意識流としての「今」に映った映像であり、所謂意識の意味である。ところが、写す働きとしての意識流、「今」は、その一輪の花に対して絶対の他者である。写す働き意識作用と、映るもの意識を被れたものとの間には深い断絶がある。

フッサールは彼の全集 *Husserliana* の第十卷『内的時間意識の現象学のために』の百頁の二十八行目の終りのあたりから次の様に述べてゐる。Die Urimpression ist der absolute Anfang dieser Erzeugung, der Urquell, das, woraus alles andere stetig sich erzeugt. Sie selber aber wird nicht erzeugt, sie entsteht nicht als Erzeugtes, sondern durch *genesis spontanea*, sie ist Urerzeugung. Sie erwächst nicht (sie hat keinen Keim), sie ist Urschöpfung. 更には三行分、Wo etwas dauert, da geht a über in xa, xa' in yx'a usw. Die Erzeugung des Bewußtseins aber geht nur von a zu a', von xa' zu xa''; dagegen das a, x, y ist nichts Bewußtseins-Erzeugtes, es ist das Urzeuge, das „Neue“, das bewußtseinsfremd Gewordene, Empfangene, gegenüber dem durch eigene Bewußtseinspontaneität Erzeugten. Die Eigentümlichkeit dieser Bewußtseinspontaneität aber ist,

daß sie nur Urzeuge zum Wachstum, zur Entfaltung bringt, aber nichts „Neues“ schafft. と述べている。即ち、根源的印象は生み出すことの絶対的始まりであり、すべての他者がそこから生み出される所の源泉である。がしかし根源的印象自体は生み出されはしない。それは生み出された者としてではなく、自発的発生によって現成するのであり、それは根源的生成である、と。根源的印象は、今の端的に、超越的「今」の力量としての絶対的創造作用によって、意識に写映した物の意味を初発的に生み出す事である。がしかしこの創造作用自体が生み出されるという事はない。これは生み出す働きそのものである。それに対して、意識の意味としてそこに初発的に生み出されたものは、絶対的意識流「今」の自発的創造作用に、外界より写映作用を通して端的に持ち来たらされたものである。根源的印象に於いて、生み出されたものと、生み出す働きそのものとの間には絶対的断絶がある。絶対的意識流としての超越的「今」そのものの創造作用のなかに、相対的有的な物の何等かの種子も蔵されてはいない。写映作用を通して意識の意味として外界より持ち来たらされたものを、今の端的に生成現成せしめる働きそのものが「今」の力量である。有限を有限たらしめる事に於いて無限は無限と成る。

が、有限的物と無限的創造作用との間には無限な断絶がある。

更にフッサールも述べている。何者かが持続しているところでは、 $a$  は  $xa'$  に、 $xa'$  は  $yx'a$  に移行行くことになる。しかしその際、意識の生み出す働きは、 $a$  から  $a'$  に、 $xa'$  から  $yx'a$  にと、ただ単に経過して行くにすぎない。それに対して  $a, x, y$  は意識（自体）の生み出されたものではない。それは意識本来の自発性を通して（意識流として）生成したものに對して、（意味として）初発的に生成したものであり、《新しいもの》であり、意識の外から（意識にやって来て）生成したものであり、（そこに）感受されたものである。がしかし意識の自発性の特質とは、ただ（意味として）初発的に生成したものを成長させ展開させるだけで、（それ自体）何等かの新しいものを創造したりはしないものである、と。ここに、意識流としての根源的創造作用と、意味としてそこに感受され生成したものととの間に、深い本質的相違があることは明らかである。

写す働きとしての超越的「今」は絶対的無である。無の流れとしての「今」の意識流は、今の知覚に於いて映るものを写し出というかたちで、知覚の内実としての印象を生

成するのである。がしかし「今」という絶対的意識流自体の内に、物的花の意味を生成する様な何等かの種子をも蔵してはいない。それはあくまで意識の写映作用を通して外界より意識に感受されたものである。超越的「今」の意識流は、今根源的（初発的）印象として感受されそこに生成したものを、保持し展開させるのみである。写す絶対的意識流と、映じ出された意識の意味としての感覺的映像との間には、それが一見（スクリーンと映像の如く）一体になって居れば居る程、この兩者の間に天地の懸隔があることが自覚されねばならない。

更にこのことは、次の様な場合を見れば一層明らかになるであろう。フッサールは同じく彼の全集の第十三卷『相互主観性の現象学のために』・一の中の三九九頁十五行目に次の様に述べている。『Aber Tod ist Auscheiden aus der Welt; und Möglichkeit eines Bewußtseins ausserhalb dieser Welt, die eine Welt für kommunizierende Subjekte ist, ist durch keine Erfahrungsschlüsse auszuschliessen, als Schlüsse, die an die Gegebenheit dieser Welt gebunden sind. Wäre ein Aufhören des Ichstromes undenkbar, so würde der Tod Fortdauer ausserhalb der Welt besagen.』しかし死はこの世界からの離別であ

る。が意識の可能性は、この世界の外側に於いて、どのような経験の終末を以てしても排去され得ない。もし自我の流れ（意識流）の中止が考え得られないとするならば、死はこの世界の外側の持続を言うのだろうか、と。意識流の流れ行く可能性が、それと関係を持ちつつある主体のためのこの世界の外側で、この世界が与えられている事と結びついた終末としては考え得られない。死はこの世の外側の持続に（意識流の）移行行く事だろうか。ここに前述の意識の意味の流れ経験流と、絶対的意識流自体との間の断絶が非常に深い意味を露呈して来る。超越的「今」の動態である絶対的意識流自体は、人間の死に於いても猶流れて止まないものである。更にフッサールは同じく彼の全集第十一卷「受用的総合のための分析」の三七七頁三十一行目に《超越的自我の不死性と超越的自我が生れるであろうことの不可能性》と題した一文を展開させている。超越的「今」絶対的意識流の不生、不死性について述べているのである。一切の衆生の中には、それぞれに不生不死の仏いませりといった様な意味に近い表現が見られる。私には非常に興味深い一文であった。これは唯識学の世界とも思ひあわせて重要な問題点であろう。超越的「今」の流れは不生不死の、しかも今我に於ける、我思うとなって現成する存

在の基底である。

### 意識と今

超越的「今」という絶対的世界の流れ、絶対的意識流は、常に永遠に相対的限定としての今、時間的今に帰属せねばならない。その際意識流は、今に於いて、意識流以外のところから何物も持ち来たらざるに、しかも常に新らなるものとして、その流れに未だかつてなきものとして流出し行くという根源的形式を持つ。フッサールは全集の同じ『内的時間意識の現象学のために』の一一四頁の一四行目の終りのあたりから次の様にのべている。Verbleibend ist vor allem die formale Struktur des Flusses, die Form des Flusses. D. h. das Fließen ist nicht nur überhaupt Fließen, sondern jede Phase ist von einer und derselben Form, die beständige Form ist immer neu von „Inhalt“ erfüllt, aber der Inhalt ist eben nichts äußerlich in die Form Hineingebrachtes, sondern durch die Form der Gesetzmäßigkeit bestimmt: ……と。なかんづく流れの形式的構造、流れの形式は変らない。即ち、流れはただ単に一般的流れではなく、どの位相もが一つの同じ形式を持っている。その変らざる形式は常に新らたに《内容》によつ

て満たされるが、その内容はまさしく外から形式の中に持ち来たらされたものではない。かえって合法則性の形式によって規定される。……と。フッサールはここで次に、今と、過去把持と、未来把持として成立する時間の根源的规定について述べるのであるが、私は今前述の一文に注目してみたい。即ち、絶対的意識流が、流れ以外のところからは何物も来たらしめずに、しかも流れの中に未だかつてなかったもの、新たななるものとして、念々に今今と流出し行くのである。この様な形式は、客観的にながめられた流れの構造としては決して成立しない。今の知覚としての意識の成立を通して、相対的時としての今を限定して行く働き、その主体、その主体の背後の、その主体となって働き行く超越的「今」の流れ、絶対的意識流に於いてこそ、そのそこに、この様な根源的形式が成立し得るのではあるまいか。絶対的主体として、根源的「今」の流れ行く事の秘心ともいう可きものが、そこに表わされている。これが、絶対的意識流が、「今」が相対的今を今たらしめつつ、今に帰属しつつ、今を超え行く姿でもあるのだ。今ここに、超越的「今」の根源性としての今性がある。この今性こそ、相対的世界、物的世界に於ける一切の創造性の根源であらう。

## 意識流

超越的「今」の流れ、絶対的意識流は、相対的流れ意識を超えた流れである。フッサールは全集の同じ『内的時間意識の現象学のために』の七四頁の二五行目の終りのあたりから次の様にのべてゐる。Ganz im Gegenteil finden wir prinzipiell notwendig einen Fluß stetiger „Veränderung“, und diese Veränderung hat das Absurde, daß sie genau so läuft, wie sie läuft, und weder „schneller“ noch „langsamer“ laufen kann. Sodann fehlt hier jedes Objekt, das sich verändert; und sofern in jedem Vorgang „etwas“ vorgeht, handelt es sich hier um keinen Vorgang. Es ist nichts da, das sich verändert, und darum kann auch von etwas, das dauert, sinnvoll keine Rede sein. Es ist also sinnlos, hier etwas finden zu wollen, was in einer Dauer sich einmal nicht verändert. 》<sup>9</sup>

それとは全く反対に、我々は原理的必然的に一つのたえずる《変化》の流れを見出す。そしてこの変化は、それが経過するがままにまなしく経過して行くのであり、《より早く》も《より遅く》も経過し得ないという不合理を持ってゐる。したがってここでは、何等かの変化する客体といふ

ものはかけて居り、どの過程に於いても《何か》が経過している限り、過程ということは問題にならない。そこには変化する何物もないのだから、持続する何物かについて意味深く語ることもない。それ故ここで、持続の中に一度も変化したことのない何物かを見出そうと欲することも無意味である、と。超越的「今」、絶対的意識流の流れは、流れる物のない流れであり、流れの速さという意味が消失してしまう外ない様な流動の世界である。そこでは流れが、より早くもより遅くも流れるということはない。流る可き様に流れて行くとしか言いようのない流れである。流れて行く物のない流れであるが故に、流れという意味の意識も消失し行くより外なき流れである。ここでは、相対的・客観の流れの意識は消失してしまっている。今、揚子江の様な兩岸の見えない、流れ行く舟一つ見えない、満々た

る流れの中の小舟に乗って居るとしたらどうであろう。それは流れている事なのであろうか。流れ全体と自己との相対的位置の変化はないとも考えられる。それでいて流れている事は確かであろう。そこでは、より早くより遅くという意味の意識を持つよすがもない。流れている事と、流れていない事とが、同じ意味になってしまふ。流れという意識が消失してしまった流れである。『往生要集』の中で、

「三世十方を一めぐりするを一念という」という言葉に出合った事がある。今、超越的「今」が、絶対的意識流が、念々に今々と帰属しつつ、超越的主体性と成って流れ行く流れの無限的風光がそこに見らるるではないであろうか。流れの意識の消失と共に、時間と空間の消失してしまつた、超越的「今」の流れがそこにある。